

映画の時空間住宅

長岡, 杏佳 / NAGAOKA, Kyoka

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院デザイン工学研究科

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies.
Art and Technology

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

3

(発行年 / Year)

2023-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030214>

映画的時間空間住宅

Cinematic spatiotemporal housing

長岡杏佳

Kyoka NAGAOKA

主査 赤松佳珠子

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

While life is varied and changing, we design spatio-temporal houses in which the time axis and space are related to each other in the present age where houses with similar floor plans are lined up. Focusing on the expression method of film that deals with space and time, it will be transformed into architecture. By experiencing spatio-temporal architecture, we create stories of living.

Key Words : spatio-temporal ,housing, film

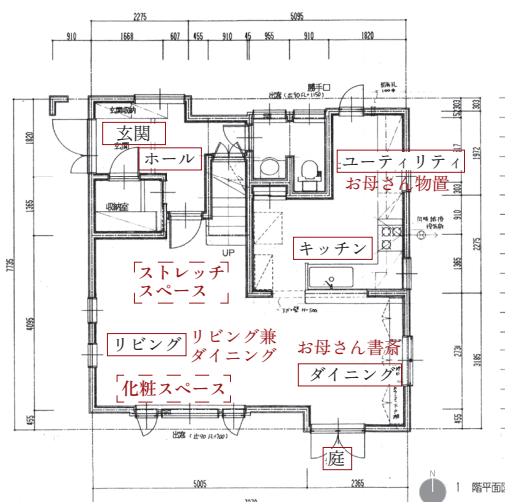
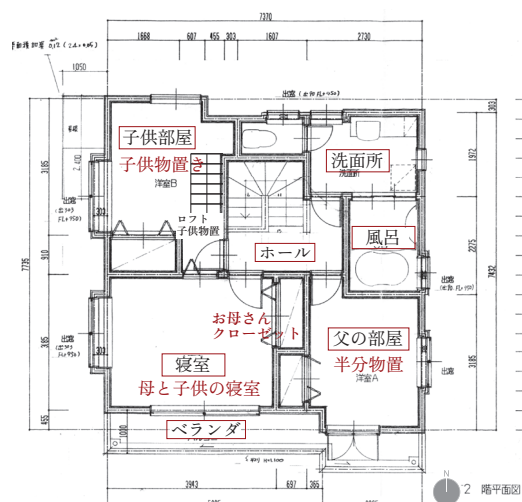
1. 暮らしと住宅の関係性

人それぞれ暮らしは様々である。そして、暮らしは、年齢、季節、時代などの影響を受けながら変化し続ける。一方で、同じような間取りの住宅が立ち続けているのが現状にあり、それらの住宅は数十年同じ形で建ち続ける。その結果、住宅に足りない要素を、時代の変化に合わせてながら急スピードで変化し続ける都市で補い始めるように暮らし、住宅は空き家、空き部屋など使われなくなってゆく傾向にある。

私が 20 年間暮らしてきた住宅もその一例であり、調査から建てられた当時に想像していた使われ方とは異なる使われ方に变化し、機能していない部屋も存在しているのが現状として明らかとなった。

図面に書かれていた
部屋名
↓
読み変えられた部屋名

私の暮らす住宅の図面と現状を照らし合わせると、図面に描かれていた部屋名とは異なる使われ方や使われなくなった部屋が見られた。また、化粧をするときは洗面台ではなくリビングで行うなど、独自の暮らしのスタイルをつくり出していた。



2. 目指すべき住宅像

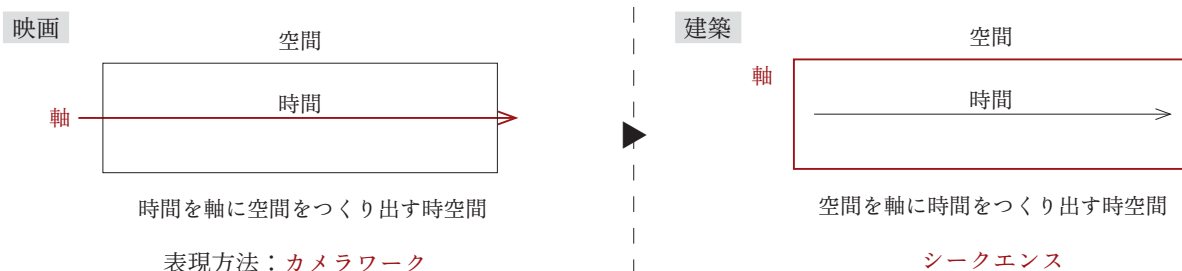
住宅とは柔軟なものではないだろうか。人それぞれ異なる暮らしをつくり出し、季節、年齢、時代の移り変わりを受け入れながら、暮らしの空間を書き換えながら暮らすことではないだろうか。移り変わる時間と空間が相互に関連しあう時空間住宅を目指す。時間を軸にしながら空間をつくり出す映画に着目し建築化することを試みる。

3. 時空間を再解釈する

映画とは、限られた尺の中で、フレームという小さな範囲を利用して、少しずつ情報を開示していくことによって構成する。その中で、被写体を大きく映したり小さく映したり、普段聞こえない音を強調したり、時間経過を速くしたり遅くしたりする。これにより、普段人間が感じることはできない情景を描写しながら見ている人は映画のつくり出す時間軸に引き込まれてゆく。そして、言葉ではない表現方法により、見ている人の感情を動かすことに加えて、見ている人を考えさせたり、見ている人の解釈の幅を広げる。

4. 映画から建築に変換する

映画は時間を軸に空間をつくり出している一方で、建築では空間を軸に時間をつくり出す。つくり出すものは同じでも、軸にしているものが異なる。そこで、映画で様々な物語を表現していたカメラワークをシークエンスに変換する。

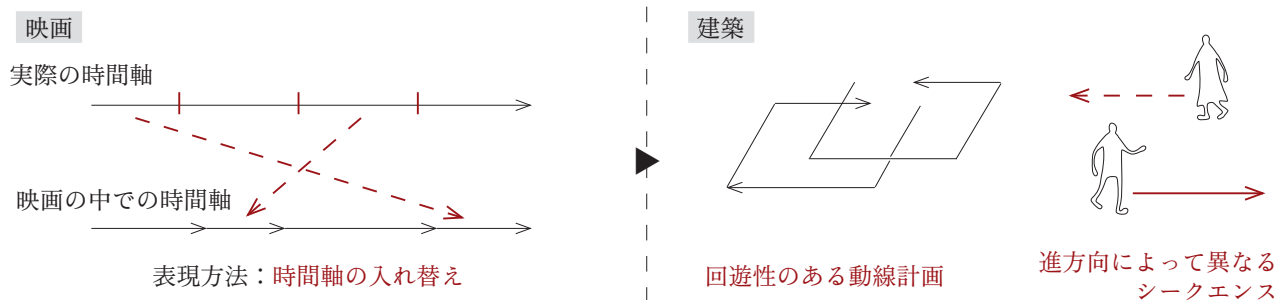


4-1. リズムの異なる空間

映画は、時間の流れを速くしたり遅くしたりするなど、時間軸を操作することで映画特有の時間軸の中に見ている人を引き込んでいる。これらから、長い動線や空間が密集している場所、曲線や直線などを用いることで、建築に様々なリズムをつくり出す。

4-2. 動線計画

一方向に進んでいく映画は時間軸を入れ替えながら物語を表現する。一方で、建築では時間軸を入れ替えたり空間を入れ替えたりすることは不可能である。そこで、一方向ではなく、他方向の空間体験が可能である。そこで、回遊性を持たせることにより、進む方向によって異なるシークエンスをつくり出す。



4-3. 動きをもつものを取り入れる

映画では、カメラを動かすだけでなく、動いているものを捉えることで時間の軸をつくり出す。そこで、光や風などの動きを空間に取り入れることで、時間によって異なる空間をつくり出す。

4-4. マテリアル

映画は明るさや暗さを利用して緊張感などを表現する。そこでマテリアルの色や素材感を用いて空間をつくることで、光が当たった時、暗くなった時で異なる印象をもたらす。

5. 計画敷地

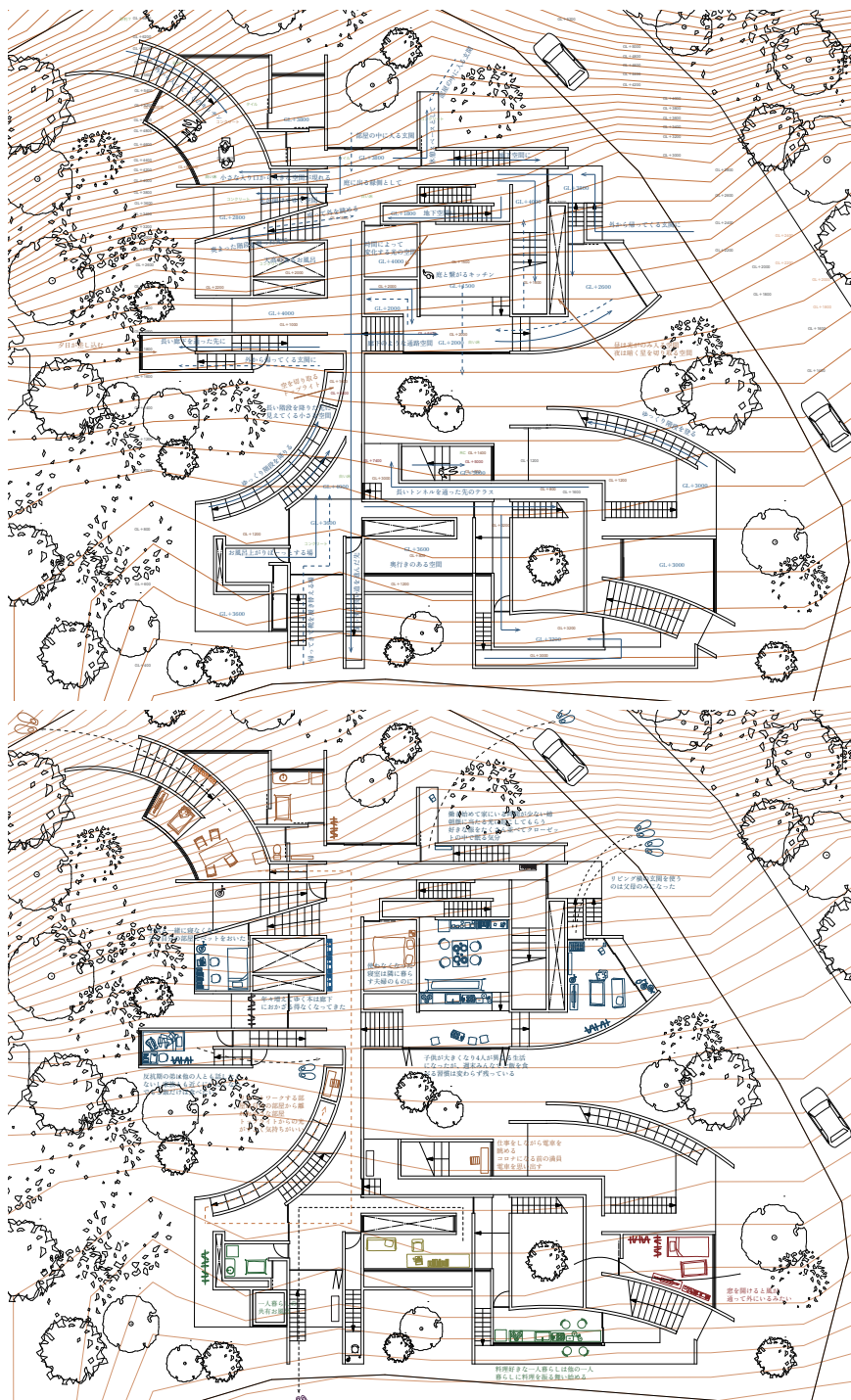
敷地は、千葉県松戸市千駄堀に位置する。松戸市は郊外であり多くの住宅が建ち並ぶ。一方で、千駄堀は自然や地形が残っている地域である。それらの残っている森の中を歩き、急に開けた場所に位置する。横の坂道を上がっていくとまた木々に囲まれた道に繋がるシークエンスが変化する間にある敷地である。

6. 暮らし

空間の大きさや長さが変わるなど一定のリズムではなく、方向によって見え方が異なり、回遊性を持つシークエンスの中で、自分の暮らしの時間軸と掛け合わせながら暮らしを作り出してゆく。このように、リズムの変化をもつシークエンスは、生活を繋げながら、自分の時間軸をつくり出す役割を持つ。一方で、長い廊下などは他人との境界の役割もする。また、用途のない動線は暮らす人を繋げる役割も担う。

このような元々生活スタイルの決められた住宅で暮らすのではなく、空間を経験し、自分の生活の物語をつくりながら暮らす。

このような暮らしは、一般化された暮らし、そして共有や私有も決められたような固定された関係性ではなく、偶発的につくられる曖昧である関係性をつくり出す。そして、一定の時間感覚になっている現代社会に対して、消費されてゆく暮らしではなく、自分の時間軸をつくりながら守りながら暮らす、一つの暮らし方なのではないか。



10. 謝辞

この度、修士設計を行うにあたり、ご指導頂いた赤松佳珠子教授に深く御礼申し上げます。また、デザインスタジオ 11 でお世話になりました小野田泰明先生、副指導としてご指導いただいた下吹越武人教授、山道拓人教授をはじめ、ご指導いただきました全ての先生方に感謝申し上げます。また、共に最後まで修士設計に向き合い続け、時にはアドバイスをし合いながら頑張った同期にも感謝しています。

11. 参考文献

「映画表現の教科書 名シーンに学ぶ決定的テクニック 100」 ジェファニー・ヴァン・ジル

「シネマ 1 運動イメージ」 ジル・ドゥルーズ

「シネマ 2 時間イメージ」 ジル・ドゥルーズ

「空間の経験 - 身体から都市へ」 イーファー・トゥアン

「実存・空間・建築」 ノルベルク シュルツ

「生きられた家」 多木浩二